

仲間由紀恵

Nakama Yukie

Text / Rie Shimtani Photo / Ko Hosokawa

Hair/Makeup / Hiroshi Tanaka Styling / Hiroko Sogawa

Costumes / MARELLA(SANKI SHOJI CO.,LTD.)(P26-29).

STRENESSE(SANKI SHOJI CO.,LTD.)(back cover)

最近は、あらためて役づくりの
楽しさを感じています。
自分じゃない者を演じるからこそ
思い切れるんです。



自分とかけ離れた役が
演技の幅を広げる

その美しさにドキドキする。現在、NHK連続テレビ小説『花子とアン』で、ヒロイン花子のよき友・蓮子を演じ、美しさと存在感ある演技で私たちが釘付けにする、女優の仲間由紀恵さん。彼女の内側にはいったいどんな情熱、ドキドキがあるのだろうか。

——代表作にしてヒット作である『TRICK』や『ごくせん』のイメージが強いからこそ、今回の蓮子のような役はとても新鮮に感じます。

そうなんです。でも、イメージが付いているからこそ次の作品で「全然違うね」と楽しんでもらえることもあります。そんな周りの反応が楽しくもあります。私自身も、この前はこういう感じだったから今回はこういう感じでやってみよう、というように自分の目標というか、役を突き詰めていくうえでの手助け、道しるべにもなっていますね。ですが、自分にまったくないものを演じなくてはならないときは戸惑うことも。それをどう理解して乗り越えるかが挑戦でもあります。

たとえば、テレビシリーズ『TRICK』の奈緒子のように、転んでみんなに笑われるお芝居。当時まだ二十歳そこそこで駆け出しだったので、どう演じていいのか、悩みました。そんなもがいている感じも、いま思えばよかったなあと思います。何とかして自分のなかで納得できるところを見つけて、これなら大丈夫という気持ちのうえで突破口を見つける、それが大変でした。後になってみてわかることなんでしょうが、自分にとってちょっと大変だったな、と思った現場の方が、後からすごく評価されたり、いい言葉をかけてもらえることが多い気がするんです。そういうことを含めて、最近はおそらく役づくりの楽しさを感じています。自分じゃない者を演じるからこそその楽しさを、自分じゃないからこそ

思い切れるんです。

——いままで演じてきた役のなかで自分とかなりかけ離れていた役、思い切れた役はどの役ですか？

世界観を含めて、やっぱり『TRICK』の奈緒子ですね。今年『トリック劇場版ラストステージ』が公開になりましたけど、14年演じ続けてもわからないことだらけ、謎が多すぎるんです、このシリーズ(笑)。撮影現場にいるときも、謎を解いてはいけないという暗黙のルールみたいなものもあったほど。でも、そういう現場だからこそ教えてもらったこともあって。全部を完璧にわからなくてもいい、そんな作品や現場があってもいいという、ひとつの受け取り方ですね。

——たしかに、面白いだけではない、想像力を鍛えてくれるシリーズでした(笑)。14年、奈緒子を演じたことよって、奈緒子の要素が仲間さんに浸透したりしていますか？

もしかしたら、知らないあいだに奈緒子のあのヘンテコな要素が自分に植えつけられているのかもしれないですね(笑)。あの役から学んだのは、コミカルなお芝居をするときは笑わせようと思っちゃいけない、気負わないということ。お芝居のときも、今日のような写真撮影のときも、気負わないよう意識するようになりました。今日の撮影のイメージは、いま朝ドラの『花子とアン』の撮影中ということもあって蓮子ではあるんですけど、蓮子を演じていないときの私、現場にいるときの素の自分に近い感じですよ。

自分が年齢を重ねてきたということ、は、当然、二十代の若手の役者さんたちが増えているということでもあって、『花子とアン』の現場で「先輩！」「仲間さん！」と声をかけてもらおうと、あ、そういう立ち位置になったんだなって。なので、気負わずに、でも先輩らしく、年上の人らしくそこに居たいし、お芝居に関しても引っぱってあげたい。彼らの頑張りを「見る」とい

ライバル心や競争心はないけれど、自分が「好きだ！」と思ったことはとことんのめり込むのが私らしさ。



意識を持って現場にいたいんです。なんだか、お母さんみたいですね(笑)。——ご自身のなかでのそういう変化を感じたのは最近ですか？

この朝ドラですね。『ごくせん』は教師役だったので生徒役の若い俳優さんがたくさんいましたけど、その作品以外で、こんなにも若い役者さんのいる現場はなかなかなかったので、すこ

く楽しいです。特に今回は吉高(由里子)ちゃん主演として花子を頑張っている。彼女を見ながら、ああ、主演の人はこうやってみんなの手厚いサポートを受けているのかと、みんなが主演に愛情を注いでいる感じが見えて、私自身も彼女を支えたいと思うんです。自分が主演のときも同じようにみなさんがサポートしてくださってい

るのはわかっているんですが、具体的にどこまでは把握していないかった。主役が知らないところでみんながずっと主役のことを考えていて、いかによく見えるか、いかに役が生きるかを突き詰めてくれている。そういう姿を見ると、なんて素晴らしいんだろうって思いますし、私も精いっぱいサポートしたいって思うんですよ。

先輩から得たものを 受け止めて、そして後輩へ

——役柄的にも蓮子は花子の先輩でよき友。花子を支えています。そんな蓮子が登場すると、場が引き締まるような存在感がありますね。

頭が大きいからというのもあるかもしれないですね(笑)。蓮子のヘアスタイルは地毛で結ってもらっているんですけど、あの格好であの頭で現場に入ると、何だか楽しくなっちゃうんです。蓮子風に「何かしら?」「ごきげんよう」って言いながらみんなと話をするのが楽しくて仕方ない。それにしても、あの格好は迫力ありますよね。誰も寄せ付けない迫力(笑)。吉田鋼太郎さんが蓮子の嫁ぎ先の旦那さん役なんですけど、吉田さんと言えば(舞台の)シェイクスピアのリア王、私にとっては迫力のある大先輩です。そんな吉田さんが相手でも、あのヘアスタイルなら私も隣に立てるかもしれない!と思います(笑)。

若い俳優さんとお芝居からも刺激をもらっていますが、吉田さんのように深みのあるお芝居をされる先輩と一緒にするのは本当に楽しくて、ものすごく気持ちを引き上げてもらっています。吉田さんが出演されているドラマや舞台を一顧客として見ているときよりも、共演者として目の前という特等席で大先輩の生の演技を見ることができるので、吉田さんの気持ちの揺れがダイレクトに伝わってくるんです。それはとても楽しいですし、役者として

そこに居るだけで

役の存在感を出せるような、

そんな女優になつていきたい。



写真協力: NHK

と思ったことはとことんのめり込むタイプ。それが私らしきなのかなと。経験を重ねたからこそ余裕とこれからの目標

当然、自分のなかにないものを求められることもあるので、それはプレッシャーですし、悩みます。最近で言う

と『森光子を生きた女』というスペシャルドラマで森光子さんを演じさせてもらったんです。そのときは実際の森光子さんを演じるのではなく、台本のなかの森光子さんを演じようと思ったんですね。とは言っても、台本のなかの森光子さんとても強い女性。戦後の日本という時代で、どうしても芝居をやりたい、主演をやりたい、仕事をやりたいという熱い思いを持って、前へ前へと生きていた方。さっきも言ったように、私にはガツガツ感やキラキラ感がそなわっていないので、なかなか感覚がわからない。でも、監督はつねにそれを求めてくる。私の平常心よりもずっとずっと高いテンションで生きている方だったんですね、森光子さんという方は。

そういう役を演じるのはとても大変でしたが、作品が完成したあとにたくさん評価をいただけたんです。そのとき、あきらめずにギリギリのところまで頑張る、そしてさらにそれを超えられるようにその先を目指す、そうやっていくと新しいものを見つけられるんだなと思えました。でも、現場は本当に大変で。「わかつてますよっ!」って声をはりあげて監督とケンカするよ

うなこともありました。いまは「必ずできる」と私を信じてくれた監督に感謝しています。

——そういう現場にはさまざまなドキドキが詰まっていると思います。高揚感を感じる瞬間はどんな時ですか?

そうですね、お芝居をしているといろんなドキドキがありますけど、いまやっている朝ドラ『花子とアン』で

うと、たとえば、吉田さんとのシーンで、お互いに気持ち激しく揺れ動くシーンを一緒に乗り越えていくお芝居はワクワクするしドキドキするし、心配も緊張もあります。その感覚はたまに楽しく瞬間ですね。

——そんな仲間さんの演じる蓮子を通じて、女性の生き方についても深く考えさせられます。

考えますよね。思うのは、いまの時代の女性は働いて、家事もして、さらに女性らしくあつてほしいとか、そういうことが当たり前だよなあって、求められていることが多い気がするんです。大変だなあと思って思います。もちろん、男性と対等に頑張れる、仕事においてはいい時代かもしれないけれど、私の場合は、ずっと仕事をしていて楽しい反面、仕事と私生活の境目がなくなつてしまつて、女性のしあわせがわからなくなっているのかもしれない。

現在、35歳。先輩たちからは、30代はプレッシャーもあるけど楽になるよと聞いていて。たしかに、20代で経験してきたことを活かせる年齢ではありませんね。すべて自由にはいかないけれど、やりたいことが明確に見えてきて、そこに向かって進んでいけるようになって、大きな目標ではなく小さなこと。

お芝居においての、こう演じたいというものですけれど、30代40代でたくさん自分のなかに経験を貯えて、60代70代になったときに、役に入るとか役をつくるとかではなく、撮影現場にただ居るだけで、呼吸しているだけで、その役としての存在感を出せるような、そんな自然体で演じられる女優になつていきたいです。

——かけがえのない大切な時間ですね。スカウトされる以前から芸能界に興味はあつたんでしょうか? それとも、ほかに夢があつたのでしょうか?

芸能界の華やかな世界への憧れはごくふつうに持っていたと思います。憧れを持ちつつも、私、幼稚園の頃から10年ぐらい、ずっと琉球舞踊をやっていたんです。師範になるためのコンクールに出たりしていたので、きつとこのまま踊りの先生になるんだろうなっていう感じではありました。踊りは好きでしたから。その琉球舞踊がいまの女優の仕事に直接つながっている

かはわからないですが、続けるということを含めて、何か精神的な面で活かされていると思っています。

——舞踊は優美というイメージがあるからなのか、お話を伺っていてもそういったものを仲間さんから感じます。つねにそんなに穏やかなんですか?

昔からなんですけど、ライバル心がないんですよ。誰かがこうなつたから私もこうなりたいたいか、そういう競争心がない。だから、若い頃は「君は仕事に興味を持っているのか?」と言われたこともありましたが(苦笑)。でも、自分が「こうしたい!」「好きだ!」

もたくさん学ばせてもらっています。そうやって先輩から得たものを今度は自分自身が後輩に、というプレッシャーもあります。それはいままでにない新しいプレッシャーですね。

——確実に前進して女優の道を開拓しているという証ですね。その道を歩くことになった、そもそのきつかけも伺いたいです。なぜ、女優になろうと思ったのでしょうか?

沖縄で育つて、スカウトに近い形でこの世界に入ったんですが、歌ったり踊ったりお芝居をしたり、いろいろ経験させてもらつて、高校を卒業すると

きにはお芝居に面白さを感じて、ずっとやっていきたいと思っていた気がします。大学はいつでも行けるけど、この仕事はいまじゃないとダメだつて、変な割り切り方ですよ(笑)。ただ、劇団に入っていたわけでもお芝居のレッスンを重ねてきたわけでもないのが、つり芝居を突き詰めてきた方と比べてたら勉強不足なところはあります。けれど、現場でしか吸収できないことも必ずあるはずで。多くの役者さんと同じく、お芝居をして、そうやって積ませてもらった経験とその時間は、私にとつてとても貴重なものです。

——かけがえのない大切な時間ですね。スカウトされる以前から芸能界に興味はあつたんでしょうか? それとも、ほかに夢があつたのでしょうか?

芸能界の華やかな世界への憧れはごくふつうに持っていたと思います。憧れを持ちつつも、私、幼稚園の頃から10年ぐらい、ずっと琉球舞踊をやっていたんです。師範になるためのコンクールに出たりしていたので、きつとこのまま踊りの先生になるんだろうなっていう感じではありました。踊りは好きでしたから。その琉球舞踊がいまの女優の仕事に直接つながっている

かかわらないですが、続けるということを含めて、何か精神的な面で活かされていると思っています。

——舞踊は優美というイメージがあるからなのか、お話を伺っていてもそういったものを仲間さんから感じます。つねにそんなに穏やかなんですか?

昔からなんですけど、ライバル心がないんですよ。誰かがこうなつたから私もこうなりたいたいか、そういう競争心がない。だから、若い頃は「君は仕事に興味を持っているのか?」と言われたこともありましたが(苦笑)。でも、自分が「こうしたい!」「好きだ!」



仲間
由紀恵

ロングインタビュー